

# 「商市街」25号

～蕭紅『商市街』抄訳～

平石淑子

蕭紅（1911～42）は1930年代の中国で活躍し、現在でもなお影響力の大きい女性作家である。蕭紅の生涯及びその作品に関してはこれまでいくつかの文章で紹介してきたので、ここでは省略する<sup>1)</sup>。

蕭紅が作家活動を開始した当時は、ちょうど満州国が建設され、その圧力が次第に強まって来る時期に当たっている。蕭紅が作家として出発した哈爾濱という都市は、中国東北地方の中でも北方にあったため、文学芸術という方面から見れば、いわゆる満州国の影響も比較的受けにくく、むしろ帝制ロシア（後にソ連）からの影響が濃くうかがえる、特殊な地域である。共産党の思想も比較的早期に流入し、中ソ両国の共産主義者たちのほか、ソ連にあこがれてモスクワを目指そうとする若者たちが集まった。中国共産党結成（1921年）の四年後には中国共産党哈爾濱特別支部が設置され、翌年には北満地方委員会が成立している。蕭紅は生涯共産党員にはならず、共産党の活動に対しては比較的距離を置いていたが、彼女の親しい仲間たちの多くは党員、もしくはシンパで、彼女も彼等の活動に参加し、その中で作家としての道を歩み始めたのである<sup>2)</sup>。蕭紅と夫の蕭軍<sup>3)</sup>の初期の散文を集めた『跋涉』（1931年10月）<sup>4)</sup>は、当時の哈爾濱における左翼文芸運動の金字塔の一つとして評価されたが、それ故に当局に注目されることとなり、結局蕭紅は蕭軍と共に哈爾濱を脱出し、南下することを余儀なくされた<sup>5)</sup>。

本稿で翻訳を試みる『商市街』は、蕭紅が蕭軍と出会い、哈爾濱のヨーロッパ欧羅巴旅館で同居を始めてから哈爾濱を離れるまでの二年足らずの生活を独特の文体で描いた散文四十一篇から成る。1936年8月、上海文化生活出版社より悄吟の筆名で出版された。これまで筆者は四十一篇の中から哈爾濱における左翼文芸活動の様相を良く映していると思われる文章を選んで翻訳を試みてきた<sup>6)</sup>。書名の「商市街」は、蕭紅が蕭軍と初めて「家」を構え、作家として出発する記念すべき街の名である。本稿は彼女が「商市街」に引っ越してから作家として活動を始めるまでの貧しい日々を描いた十篇の文章を訳出するものである。

## 引っ越し（搬家）<sup>7)</sup>

引っ越しだ！引っ越して何？ねぐらを移すということでしょう！

一台の馬車に、二人と長方形の箱一つ載せて。荷物も箱の中。車は交差点にやって来た。行き交う車、歩道を行く人、店の大きなショウウィンドウの中の「マネキン」……車が追い越して行く。別の馬車が私たちを猛スピードで追いかけて来る。馬車にはカップルだろうか、女性の巻

き髪が帽子からはみ出て踊っている。男性の長い腕は使い道が分からないというように、ただある種の表現として、女性の後ろに隠されている。馬車が追い越して行った。あれはきっと恋人たちがドライブをしているのだ……引越しをしているのは私たちだけ。空には水っぽい、雪融けの頃の春の氷のような白い雲が浮かんでいる。私は白い雲を見上げた。風が私の耳元を吹き抜け、私の耳を震わせる。

着いた。商市街××号<sup>8)</sup>だ。

彼は箱を抱え、私はたらいを持ち、長い中庭をぬけて、その一番奥。最初にドアを開けたのは郎華<sup>9)</sup>。彼が言った、「入ろう！」

「家」にはこうやって引越しして来た。これが「家」なのだ。

一人の男の子<sup>10)</sup>、ぶかぶかの長靴をはき、飛んだり跳ねたりしながら大声で、「お母さん……先生が引越ししてきたよ！」

この子は彼の武術の弟子<sup>11)</sup>なのだ。

借りてきた鉄製のベッドは、入り口からも入らない、窓からも入らない。入らないならまさか、地面に寝るの？何も掛けずに寝るの？何を敷くの？

「先生、斧で叩けばいいよ」。長靴の子どもが斧を探しに行った。

鉄製のベッドは既に縦に立てられて入り口をふさいでいた。出そうにも出せなくなっていたその時、郎華が斧で叩いた。鉄と鉄が打ち合わされて震動し、ドアの上のガラスが二つに割れた。結局ベッドは運び込まれ、むき出しのまま床の真ん中に置かれた。それから大家さん<sup>12)</sup>からテーブル一つと椅子二つを借りた。

郎華が出かけて行った。水桶や包丁、茶碗を買いに行くと言って……

冷えたせい、たぶん疲れたせいで、お腹がまた痛む。台所に行ってみると、竈の火が消えていた。引越しして来る前、たぶん誰かが火をおこしていたのだ。だから竈の中ではまだ薪が燻っていた。

鉄のベッドは骨組みをむき出しにしたままだったし、ガラス窓には次第に氷が付き始めていた。午後になると太陽は暖かさを失っていき、風が次第に砂を巻き上げながら窓に打ち付け始めた……冷たい水で床を拭き、窓の台を拭き……全部やり終えて何もすることがなくなってしまふと、手が少し痛み、足も少し痛いのに気づいた。

ここは旅館のように静かではない<sup>13)</sup>。犬が吠え、鶏が鳴き……人が騒いでいる。

竈の上の鉄板に手を置いても暖かくはならない。竈では最後の残り火も消えてしまっていた。お腹が痛いのでベッドに横になりたいのに、ベッドはどこ！水みたいな鉄の骨組み、絶対近づけない！

空腹だったし寒かった。お腹も痛いのに、郎華はまだ帰って来ない。もういやだ！時計もないから時間も分からない。何て殺風景で、何て寂しい家だろう！井戸に落ちたアヒルみたいに寂しくて孤独。腹痛と寒さと飢えが私に寄り添う……家ですって？夜の広場みたい。太陽の光もないし、暖かさもない。

門がガラガラと大きな音を立てた<sup>14)</sup>。郎華が帰って来たのだ。彼は小さな水桶の蓋を開けて見せてくれた。ナイフ、箸、茶碗、やかん、彼はそういった物を全部並べ、紙包みの中の白米も袋から出して見せた。

彼がそばにいただけで空腹は我慢できたし、腹痛も軽くなった。買って来たむしろは外に置いてある。私はまだピンとこなくて彼に尋ねた。

「買ったの？」

「買ったんじゃないかったら、どこから持ってきたの？」

「お金、どのくらい残ってる？」

「残ってるだって？これじゃ足りないって言うんじゃないだろうね！」

彼が薪を買って戻ると、私は火を付けることにした。竈に立って、何と若い奥さんみたいに夕食の支度をしている。菜っ葉は焦げてしまったし、ご飯は生煮えのまま食べた。これをおかゆと言うなら、おかゆより少し硬い。ご飯と言うなら、ご飯より少し水っぽい。これは私が「婦人」になったということ。婦人じゃなかったら、どうして食事の支度ができるの？婦人じゃなかったら、どうして食事の作り方が分かるの？

夜大家さんが来たのは、たぶん先生にご挨拶するという意味だったのだろう！大家さんはあの長靴を履いた子どもの父親なのだ。

「三番目の姉さんが来たよ」。暫くしてその子がまたドアを叩いた。

私は彼女のことを全然覚えていなかったけれど、彼女は、学校で毎日のように私を見かけた、運動場でも講堂でも、と言う<sup>15)</sup>。私の名前もよく覚えていた。

「三年も経っていないのに、こんなにすっかり忘れてしまうなんて……どのクラスだったの？」と私は尋ねた。

「9組よ」

「9組だったら、郭小嫻と同じクラス？郭小嫻は毎日バスケットをしていたわ、彼女なら知っている」

「ええ、私もバスケットをしていたのよ」

だがどうしても思い出せない。向かいに座っているのは全く見たことのない顔だった。

「あの頃、あなたは10何歳？」

「15歳よ！」

「あなた若すぎるわ、学校では小さな子はほとんど知らないから」。私はちょっと考えて、そして笑った。

彼女のカールした髪、紅を塗った唇、私よりまだ少し年上に見えた。思い出が私を完全に昔の気持ちに引き戻していたから。実際私は22歳<sup>16)</sup>、彼女よりずっと老けているのだろう。特にろうそくの明かりの中では、鏡に映したら30歳よりもっと老けて見えて、惨敗するに違いない。

「姉さん！先生が来たよ」

「ロシア語の勉強に行くわ」。弟が外で彼女を呼ぶと、彼女は立ち上がってそう言った。

とてもさわやかで、本当に若い女性そのもの、背は高いし、ほっそりして、すらりと外に出て行った。

## 最後の薪（最末的一塊木）

竈は火が付いては消えるので、消えたらああしてみたりこうしてみたり、三度目に消えた時に

は頭に来た。私はもう自分の怒りを抑えきれなかった。凍え死んでしまえばいい、餓死してしまえばいい、火も付けられないなら食事の支度もできない。その日の朝のことだった。手を竈の口でやけどし、爪まで焦がして欠いてしまったのだ。もう炎が竈の口から吹き出している。私は炎に向かって腹を立てていた。女の子の甘ったれ気分<sup>17</sup>が抜けきっていないのだ。私は窓の外を眺めた。やるせなかった。足も凍えて痛かった。泣こう。でもずいぶん経っても涙は出て来ない。もう甘ったれじゃないんだから、何を泣くの？

夕食の支度の時、薪は一本しか残っていなかった。一本の薪で、どうやって火がおこせる？こんなに大きな竈に一本の薪。竈の二十分の一しかない。

「寝よう、寒すぎる。腹が減ったらうどんを食おう」。郎華が掛け布団を揺らしながら呼んだ。

靴下を脱いで、足を布団の中で縮めた。自分の足を自分の腹に付けて暖まろうと思ったのだが、無理だった。足が長すぎて、どうにもうまくない。足なんて本当に役立たずだ。布団に潜っても震えてしまう。窓に付いた霜が、もうあんなに厚い。それに周りの壁の緑色と金色の縁取りが余計に寒々しい。二人の息が煙のようだ。ガラスに付いた霜が、まるで川に落ちた柳絮<sup>18</sup>のように、みっちりけば立っている。夜になったのかも、夜が明けたのかも分からない。明暗のない奥まった部屋。住人はまるでキノコだ。

夜中に目を覚ました。お腹はすいていなかったが、ただ寒かった。郎華が裸のまま飛び起きてろうそくをつけ、台所へ水を飲みに行った。

「冷えるわよ、風邪を引くわ！」

「この体を見ろよ！寒くないさ」。彼の性格はそうだった。私に強がってみせる。ベッドに入ってもまだ、自分の肩を何度も叩いていた。私は彼の氷のような身体を温めながら震えていた。恋しい人の身体は火のように熱いと言うけれど、この時はそんなこととても信じられなかった。

翌日、まだ薪は一本。彼が言った、借りて来よう！

「どこから借りるの？」

「汪さんち<sup>19</sup>から借りよう」

一枚のメモを書き、門口で彼の学生汪玉祥を呼んだ。

年取ったコックが腕一杯に薪を抱えてやって来た。

三十分も経たないうちに私の顔もきつと赤くなる。郎華の顔が赤くなってきたから。窓は水がしたたり、水はそこから床に流れる。窓の外を行き交う人もよく見えるし、窓の外で餌をつついてる鶏もよく見える。黒いの、茶色いの、まだらのも。

「先生、武術の稽古でしょう。9時ですよ」

「ちょっと待て、飯を食ったら稽古する」

薪はあるけれど米がない。何を待つんだらう。待てば待つほどお腹がすく。彼は武術の稽古が終わると金を借りに出かけて行った。金を借りられたら大きくて厚い餅<sup>20</sup>を買って帰るだらう。薪は一本しか残っていない。どうしよう。また夕食が食べられない。

一本の薪を見ていると、愛しくもあり、憎くもあり、また惜しくもあった。

## 黒パンと白い塩（黒“列巴<sup>21)</sup>”和白塩）

ガラス窓にまだだんだんと霜が付き始めた。外を通るのが人か犬かも区別が付かなかった。

「俺たち新婚だよね」。彼のこの言葉が妙に響いた。彼の口元の湯飲みのお湯に小さな丸い波が立つ。彼は湯飲みを置き、黒パンに白い塩を付けて口に放り込んだ。多分パンはもう喉の中にもないだろう。彼はまた言う。

「今は蜜月だよね」

「そうよ、そうよ」。私は笑った。

彼は急いでまた黒パンを一切れ取り、塩を付け、映画の蜜月の真似をして、塩を付けた「列巴」をまず私の口に運んだ。私がそれをかじってから彼が食べる。多分塩を付けすぎたのだろう。舌が辛くなって、彼は慌てて水を飲みに行った。

「だめだ、だめだ、こんな風に蜜月を過ごしていたら、しょっぱくて死んじゃう」

塩は結局バターではないから、食べても甘くもないし、美味しくもない。私は彼の横で笑った。

光は部屋に全く入って来ない。四方は壁で、窓も役に立たなくなっている。洞窟に閉じ込められているみたいに、外の世界とは隔絶されている。毎日ここで生活するのだ。粗末な食事。食べない時もある。伝説の、仙人の修行をする人の難行苦行のようだ。成果が上がって修行がうまくいけば、顔は土気色になり、身体も痩せるだろう。私の目はいよいよ大きくなり、彼の頬骨は木みたいに突き出すに違いない。こんな修行を達成しても仙人にはなれないのだ。

「金を借りよう」、「金を借りよう」、郎華は毎日「金を借り」に出かけて行った。彼が借りて来る金はいつもほんの少し、30銭とか50銭。1円借りて来るのは本当に珍しいこと。

黒い「列巴」と白い塩は、長いこと私たちの唯一の命綱だった。

## 生活（度日）

空は毎日曇っていて、一筋の光もなく、完全に灰色だ。どのくらい灰色って？墨汁をたらいの水に落としかくくらい。

調理台はピカピカに磨いたし、茶碗も箸もナイフも棚に並べた。朝起きて最初の仕事は竈に火をおこすこと。それから床やベッドを拭く。

竈の鉄板が熱くなると、私はそこに立って食事の支度をする。包丁やお玉が音を立てる。火が竈の中で小さな破裂を起こし、釜が湯気を上げる。葱が油の中で炒め上がった美味しそうな香りを立てる。私は葱が油の中で転げ回り、次第に黄色く変わっていくのをじっと見ていた……小さなナイフが、梨の皮をむくようにジャガイモを白くそいでいく。とてもきれい。皮をむいたジャガイモは乳白色で、柔らかく、弾力がある。調理台に紙を一枚敷き、ジャガイモを更に薄く切る。ご飯が炊け、ジャガイモが焼き上がった。小窓を開けて外を見ると、中庭の真ん中で子犬が何匹か遊んでいた。

家庭教師はまだ終わらない。おかずやご飯の香りが私を竈に引き戻し、味見をさせようとする。さじでご飯の味見をし、更におかずの味見をする。手早い様子は盗み食いをしているみたい。床

を歩き回る。一時間の授業がまだ終わらないのかしら。そこでまた鍋の蓋を開けて何口か呑み込む。また小窓から外を見る。そろそろ満腹になりかけた頃、彼はやっと帰って来た。いつものことでそうだと分かった。彼はいつも中庭で大きな咳払いをする。ドアの後ろに隠れて彼を待つ。彼が見つけるのを待ちかねて、奇声を上げて飛び出すこともある。

朝食が終わると茶碗を洗い、鍋をこすり、調理台を拭き、木の棚を拭く。時計があつたら、恐らく11時過ぎだろう。

それから三、四時間経つとまた夕食の支度。彼は職探しに出かけ、私は家で食事を作り、家で彼を待つ。調理台の所をぐるぐる回り始める。毎日食事をし、眠り、薪の心配をし、米の心配をする……

こうしたことが私にある感慨をもたらした。これは子供時代じゃない、生活だ、生活が始まったのだ。

## 雪の日（飛雪）

夜のこと、ちょうど食事時に門番がやって来た。

「外にお客さんだよ」

雪を踏んで鉄の柵の向こう側を見ると、知らない人が一人。武術の先生を訪ねて来たのだと言う。それでその人は私の後から部屋に入って来た。彼は入り口で足拭きを探したが、そんなものは用意していない。居心地が悪そうに、彼は床が汚れるのを気にしていた。台所に明かりはなく、そこを通る時、その人は足に付いた雪で転びそうになった。

一時間が経ただろうか。私たちのうどんはお椀のなかで冷え切っていたが、彼は帰ろうとしない。しかし「武術」を習いたいのかどうかも言わず、ただハンカチで口を拭いたり、目をもんだりしている。寝てしまうんじゃないだろうか。私は固まったうどんを箸で崩しながら、彼が外套の襟をちょっと立てたのを見た。今度こそ帰るんだ、と思った。しかし帰らない。耳が冷えるのが嫌で、皮の襟で暖を取ったのかも知れない。実際はどうしたって家の中で耳が凍りつくなんてことはあり得ない。なら彼は椅子で眠りたいのだろうか。ここは寝る場所？

結局彼は「武術」を習うとも習わないとも言わず、帰りがけによやくこう言った。

「考えてみます……考えてみます……」

ここへ来て考えてみるという人がよくいる。もう一度来て、もう一度考えてみるという人もいる。すぐに決める人は一人もいない。習うにしろ、習わないにしろ。どうも面と向かって習わないと言うのは申し訳ないと思うらしく、習うと言ってしまえば、月謝をもうちょっと下げてもらえなくなると思うのだろうか。結局は武術の先生の方から月謝を少し負けましょうと言って欲しいのだ。

食事時は落ち着かなかつた。彼にうどんをよそってやり、自分によそう。少しすると灯心を切る。そうしないとうろうそくの火がゆらゆらして落ち着かない気分になるのだ。

二人は一言も話さず、ろうそくに向かって冷たいうどんを食べている。雪がまたひどくなった！汚れた水を捨てに外に出ると、髪に雪が混ざる。戸口から外を見ると、明かりで雪がどこまでも白い。あっという間にこの世界を覆い尽くしてしまいそうだ。

郎華はやっとのことで借りて来た襟付きの外套を羽織り、向かいの家へ武術の稽古に行った。彼の腕を通さないままの袖は大雪の中には入って行かない。彼が向かいの家のドアを開ける音が聞こえた。客間に明かりがついた。私は窓に向かう。雪がひっきりなしに落ちてくる。寂しく厳粛な夜が私を取り囲み、とうとう咳き込んで小窓を閉めた。本を取り出したが、何頁も読まないうちにまた小窓を開けた。雪はひどくなっただろうか、小降りになっただろうか。人は退屈していると風や雨、あらゆる気象現象に注意が向く。雪は更にひどくなり、雪の粒と雪の粒とが入り乱れている。

大きな足音が表門から続く通路に響いた。中庭に入ると、靴の音は小さくなった。汪林<sup>22)</sup>が帰って来たのだと分かった。昔のその友人は中国のか外国のか分からない服を着て、外の本製の階段で立ち停まり、呼び鈴を鳴らした。女中、つまり小間使いがドアを開け、尋ねる。

「どなたですか？どなた？」

「私よ。分からないの！どなた、どなた、って！」彼女はちょっといらいらしていた。若い娘は若さのためにより傲慢になる。しかし小間使いになるような娘はそんなこととは全然無縁だ。雪が降っていなかったら、その娘が訳が分からないまま首をすくめて戻って行くのを見ることができたのに。

また本を読み始めた。そしてまた雪を見た。何頁も読んだけれど、それが何？私にも分からない。私の心に残っているのは大雪が降ったことと寒くなったことだけ。じゃあこの後私は家から出られなくなっちゃうんじゃないかしら？郎華は帽子も被っていないし、服に襟も付いていない。耳が凍傷になってしまうんじゃないかしら。

家の中では、竈に火が燃えていさえすれば私はそのそばに立つ。もっと寒くなれば鉄の調理台に坐って自分を暖めてもいい。薪がなければ布団を被ってベッドにしよう。一日中ベッドから離れず、一晩中ベッドから離れない。でも外にはどうやって行ったらいい？布団を被って街に行くの？そんなことできるの？

私は両足を竈に突っ込んだ。足をピンと伸ばし、そうやって椅子に腰掛けてドアの方を向いて本を読む。本を読むですって。読むふり、何も考えていない。

郎華が家に入るなり、「ハムをあぶってるのか？」

私が尋ねる、「雪はどう？」

「この服を見ろよ！」彼はタオルで外套をはたいた。

雪は、私に不安をもたらし、恐怖をもたらし、一晩中様々の嫌な夢をもたらす……子豚の大群が雪の穴に落ち……電線で雀が凍死する。雀は死んだのに、まだ電線に引っかかっている。人は広野の白い大きな木の所で、一列一列硬直する。四肢が全部凍ったままの人もいる。

こんな夢を見た後、でもいつもこれが夢かどうか分からず、だんだんと頭がはっきりしてきてようやく郎華にしがみつく。でもいつもこれが本当ではないということが信じられない。そこでこう言う。

「どうしてこんな夢を見るのかしら？どんなことか、占いだったら分かるんじゃない？」

「馬鹿だなあ。全て科学的に解釈しなきゃ。こんな夢は一種の気持ちの問題なんだ。気持ちはどこから来る？物質の反映さ。自分の肩に触ってごらん、こんなに冷えて。肩が冷えたと感じたからそんな夢を見たのさ」。彼はまたすぐに眠りに入ってしまった。取り残された私は、風が天

井や床下から吹いてくるような気がして、鼻が冷え、また耳が凍った。

夜、雪はどのくらい降っただろうか。朝起きたらきっとドアが開かない！そういえば私の祖父が言っていた。大雪の年は子供が雪の中に立つと頭が出ないって……風が絶え間なく窓を叩き、犬が裏で吠えている……

凍えたことで空腹を思い出した。明日は米がない。

## 彼の唇に霜が付く（他的上唇掛霜了）

彼は毎夜毎夜、寒々しい月の冷たい光の中へ出かけて行く。五里<sup>23</sup>も離れた辺鄙な街で二人の人に国語を教えるのだ。これは新しく見つけた仕事、いや、仕事とは言えない、新しく見つけた15円としか言えない。

耳を出したまま、外套の襟も顎を覆うことはできない。こんな恰好で夜な夜な出かけて行く。夜ごとに寒さはつる！人々の雪を踏みつける音も大きくなっていく。彼は雪を付けたまま帰って来る。ズボンの下の方は真っ白、靴も半分雪で湿っている。

「また雪？」

彼は答えようとしなない。私のことを怒っているみたい。靴下を脱ぐと、その口に雪がたまっている。私は彼の靴下を扉に打ち付けた。ほんの少しの雪が振り落とされたが、靴下のほとんどは湿っていた。竈で靴下をあぶると、酷い匂いが部屋中に広がる。

「明日の朝は飯を遅くしてくれ。南崗<sup>24</sup>に武術の稽古をしたいという人がいる。帰ってから食おう」、彼は無表情のままそう言った。声はとても低かった……少し厳粛に言いたかったのかも知れないし、これが普通のことではないと、わざわざ思わせたかったのかも知れない。どちらなのかは、私には分からなかった！

彼は裸足になって靴を履き、向かいに武術の稽古に出かけようとする。

「ちょっと待って、靴下がもうじき乾くわ」

「はかない」

「どうしてはかないの。汪さんのところには若い娘さんがいるのよ」

「娘がいるからって何だ？」

「みっともないじゃないの」

「何がみっともなくて、何がみっともないんだ」。彼は裸足のまま出かけて行った。娘たちに見られるのも恐れずに。汪家には二人の美しい娘がいた。

彼は忙しい。朝起きると南崗に飛んで行き、食事が済むと若い弟子に国語を教える。全部やり終えると今度は金を借りに走る。夕食後、また武術の稽古をし、また中学の教科書を教えに行く。夜、彼は寝てしまうとどうやっても起きない。私はとても孤独だった。昼間は家具と向かい合って一人で黙っている。口はあるけど話さない、足はあるけど歩けない、手はあるけど何もすることがない、廃人みたい。何て寂しいんだろう！視線も壁に遮られる。窓の外の雀を見ることもできない、何もできない。ガラス窓には分厚く、綿毛のような霜が付いている。これが「家」なのだ。日の光もなく、暖かさもなく、音もなく、色もない、寂しい家、貧しい家、草も生えない荒涼とした広場。



私は通路の小さな窓に立って郎華を待つ。お腹はすいている。

鉄のドアが鳴った。私の神経は震えた。鉄の門が音を立てたのは何度となく。でも行き来する人は皆私とは関係のない人たち。汪林の大きな皮の襟と大きな音のするハイヒールはとでもつりあっている。彼女はしゃなりしゃなりと満足気だ。お腹は多分十分満足しているのだろう。私に笑いかけ、おどけた様子で指を指す。

「あら！またあなたの郎華を待っているのね……」。彼女はさっさと入り口の前の木製の階段までやって来て、更に言う。「彼は出て行き、あなたは毎日彼を待つ、本当に素敵なカップルね！」彼女の声が冷たい空気の中でキンと響いた。若い娘特有の声なのだろう。彼女のこと、私はすぐに忘れてしまった。もともと彼女に会ってもいないし、彼女のことを聞いてもいなかったのかも知れない。もし私が男だったら、恐らくそうでしかない。お腹が鳴り始めた。

汪家の台所から味噌を炒める匂いが漂って来た。ずっと向こうなのに、私には分かった。あの家は炸醬麵だ。味噌を炒めるお玉が音を立てる。まるで炸醬麵、炸醬麵と言っているみたいに……

通路に立っていると足が冷えて痛くなり、鼻水が垂れた。私は部屋に戻り、二重のドア<sup>25)</sup>を閉めた。何を考えたらいいのだろう、長いこと黙ったまま坐っていた。

汪林の二番目の姉さんが物置<sup>26)</sup>に食べ物を取りに来た。私は汚れた水を捨ててに行き彼女に出会った。いつもはほとんど話をせずよそよそしいのに、今日はこう言う。

「映画、見に行っていないの？ 今度のはいいわよ、胡蝶が主演なの」。彼女の青い大きなイヤリングがずっとぶらぶら揺れ続けていた。

「行っていないわ」。私の服には寒さがしみ通っていた。

「今度のはとてもいいの。最後は結婚する、見た人はみんなそう思うの。もし続きがそうになったら、どんなに素敵かしら……」

彼女のご親切にドアの所までやって来た。ドアの隙間からも彼女の大きなイヤリングが揺れているのが見えた。

「入って行かない？」

「結構よ、食事だから」

郎華が帰って来た。彼の唇には霜が付いていた。汪二小姐が離れて行っても、彼女のイヤリングと話し声がまだ漂っていた。「あなたの蜜月の人が帰って来たわよ、彼が来たわ」。

何て寂しい、何て荒涼とした家だろう！彼はポケットから焼餅<sup>27)</sup>を出して私にくれた。彼はまた出て行った。映画の看板描きの募集があるから応募してみると言っていた。

「いつ戻るの？ いつ帰ってくるの？」私は外まで追いかけて尋ねた。長いこと捕まえられずにいた鳥が、捕まえた途端飛んで行ってしまったように。失望と寂しさ。焼餅は食べたが、飢えはおさまらなかった。

娘たちのイヤリングが、郎華の唇の上の霜と対照的だった。向かいに住むあそこの娘たちは、映画を見、イヤリングを付けている。私の家は？ 私の家は……

## 質屋（当舗）

「君が質屋に行けよ、君が。俺は行かない！」

「いいわ、私が行く。喜んで行くわ。質屋なんか全然怖くない。胸を張って行くわ」

新調したばかりの私の綿入れ。一度も袖を通したことがないのに、私と一緒に質屋に行くのだ！質屋の店先で少しうろろうした。家を出る時郎華が言った金額を思い出したのだ——2円でなければ入れるな。

包みを番台に置くために、顔を上げ、腰を伸ばした。つま先で立って差し出す。質屋はどうしてこんなに高い番台にするのだろうか！

帽子を被った人が服の品定めをしている。彼が何か言う前にこう言った。

「2円で」

その人はきっと私がふっかけたと思ったのだ。そうでなければなぜ私をちらとも見ようとしな  
いのか。品物を丸め、包みを私の頭の上に、ほとんど投げ捨てるかのように置いた。とても不機  
嫌そうだった。

「2円でだめならいくらになります？」

「いくらにもなりません」。その人は長いスイカのような頭を振った。小さな帽子の天辺の赤い  
ボンボンもそれと一緒に揺れた。

私は手を伸ばして包みを受け取る。全然怖くなかった、堂々としていた。私には彼がわざと難  
癖をつけているのだということがよく分かっていて、包みを受け取って店を出よう。予想は当たっ  
ていた、彼は包みを私に渡そうとしない。

「50銭！この服は袖が細すぎて、売れませんからね……」

「だめです」と私。

「では1円で、……これ以上は無理です、この値段で……」。彼は腰をわずかに後ろに曲げた。  
番台が高いので、彼の突き出した腹は見えなかった……一本の太い指が、彼のこめかみと同じく  
らしいの高さにあった。

1円札と控えを持って急いで戻った。足取りは軽かった。気持ちの上ではとても金持ちになっ  
ていた。市場や米屋を通り、腕に沢山の品物を抱えた。こういった物を抱えることが夢だった。  
手は凍えて痛いけれど、それは当たり前。手なんかどうでもいい。そもそも手は私に奉仕すべき  
ものなのだから、凍えてだめになったところで惜しくはない。肉まん屋の前を通りかかると、更  
に肉まんを10個買った。自分がこういった物を持っているのを見ると、誇らしい気分になり、し  
ばしば血が湧き立ち、手が凍えてどんなに痛くても、何とも思わなかった。道ばたで年老いた乞  
食に出会った。足を止めて銅貨を一枚恵んだ。私には食べる物があるのだからこの人も食べるべ  
きだと思ったのだ。でも沢山はやらない、銅貨一枚だけ、私もまた使うのだから！控えをさぐっ  
たが、ちゃんとあったのでまた歩き出した。手の痛みは何も感じなかった。もうじき家だ！もう  
じき家だ。だが背中汗びっしょり、足はふらふらで、目も少し痛かった。表門まで来て初めて、  
引越して以来一度も街に出ていなかったことに気付いた。歩く足は力が入らないし、太陽の光  
も怖くなった。

再度控えを確かめてから、中庭に入った。郎華はまだベッドにひっくり返っている。私が出て行った時のままだった。彼はまだ質屋に慣れない。何を考えているのだろう。肉まんを見せると飛び起きた。

「腹がペコペコだ。君も戻らないし」

10個の肉まんのほとんどを食べてから、ようやくあれこれ聞き始めた。「いくらになった？質屋に騙されなかったか？」

控えを彼に見せると、その少ない金額を見つめながら、

「1円ポッキリか、ずいぶん少ないな」

借りた金は少しだったが、肉まんを食べたかったのだから結果的には大変満足だった。彼が肉まんを食べる口は肉まんよりも更に大きく見えた。一つ、また一つ、肉まんはすっかりなくなってしまった。

## 借金（借）

「女子中学」の門の前。三年前、ここで勉強した学校だ。三年前と同じ。窓、窓の前の木、低い板壁、塀の外の大通り。石畳の一つ一つを私は踏んだことがある<sup>28)</sup>。塀の内外の木々にはまだ私の温かな記憶が残っている。近くの家は私に昔の気持ちを思い出させてくれる。

だが私はその全てを記憶しきれていない。温かいものでも、苦いものでも、全部は記憶しきれていない！私がああ建物にいた時、それがまさに私の青春時代だったのだ。

既に夕方、冬の夕方だ。私はセメントの階段に足をかけ、軽やかに歩を進めた。三年前に押したことのある呼び鈴が、また私の手で押されている。出て来て門を開けてくれた小使いさんはまだ私を覚えていた。階段を上がったたり下りたり走り回っている生徒たちがひそひそ声で話している。「誰のところに来たのかしら」。

あらゆる物に馴染みがあった。事務の札、郵便箱、電話室。衣裳掛けは三年の間移動もされず、受付の外にそのままあった。

私はすぐに中に入れなかったことで、馬鹿にされたような気分になった。昔の友達はまだいるけれど、教室はもう変わったかも知れない。宿舎が上の階だったか下の階だったかも忘れてしまった。「梁先生——国語の梁先生はいらっしゃいますか」、小使いにそう尋ねた。

「おいでになることはおいでになります、教務会議中です」

「いつ頃終わりますか」

「恐らく7時でしょう」

壁の時計はまだ5時になっていない。待っていても望みはないので校門を出た。その時、私にはもう来た時の気持ちはなくなっていた。石畳とか、木とか、私とどんな関係があるの。

「吟<sup>29)</sup>——ここだ」、郎華が離れた街灯の下で私を呼んだ。

「帰りましょう、行きましょう」。私は彼に歩み寄ったが、余計なことは言わなかった。

坂になったまっすぐの道をずいぶん歩いてから初めて、

「梁先生は教務会議中で、7時までですって。待ってられる？」

「じゃあ君は歩けるのか？腹は痛くないのか？」

「痛くない、痛くない」

満月が東の小さな林の梢に透けて見える。暗褐色の満月の大きくて濁った様は、老人の澱んだ目のよう、空に垂れ下がっている。足下の雪はつるつる滑り、音を立てる。ずいぶん歩いても通行人は一人もいない。駅に着いた！大時計が暗褐色の空で光っている。汽車の汽笛が凍り付いた空気を震わせる。電車、汽車、馬車、人力車。駅前にはこれらがひしめいていた。

電車道<sup>30)</sup>を歩く。電車がベルを鳴らしながら、私の横を一台一台通り過ぎて行く。金を借りられなかったから電車には乗れない。歩こう、頑張って歩こう、お腹が痛いなんて言えない。橋まで来た。東に向かう汽車だろう、煙を吐きながら橋の下を通り過ぎて行く。振動で耳鳴りがするくらい。鎖のように街に向かって這って行った。丘の上から眺めると、一番遠い所に店のネオンが絶え間なく瞬いている。夜の人家は煙の中にあるみたいだ。窓から流れ出す明かりがなければ、建物という建物は暗く寂しいものになってしまう。鐘の音の消えた大聖堂のように！丘に立って下を見ると、「許公路」<sup>31)</sup>の明かりが、太陽の下の、長く繋がったいくつもの黄色い銅の鈴を引っ張ったよう。遠くに行くほど、それらの鈴はどんどんくっついて、次第に数えられなくなる！

頑張って歩く、ぼんやり歩く。夜とか、街とか、全て暗渠だ。私たちはその溝の中で転がっている。手を繋ごう！引っ張り合いながら歩こう！こんなに寒く、道もこんなに滑る。私はしょっちゅう滑って転びそうになった。足下がふらふらして、一人ではだめだ。映画館の前でとうとう転んでしまい、氷の上に座りこんだ。道は到る所、凍っていない所はなかったから。膝の関節を痛めたのだろう。彼が引っ張ってくれたけれど、歩くのも難しい。「転んで腹を打ったんじゃないのか？本当に歩けなくなったのか？」

家に戻り、残っていたわずかの米をおかゆにした。塩もない、油もない、おかずもない。ちょっと腹を温めただけで終わりだ。食事をしたけれど、お腹はまだ温まらない。ビスケットの箱にお湯を入れたが、お湯が漏る。郎華がガラスの空き瓶にお湯を一杯に入れて私のお腹を温めてくれようとしたが、瓶の底が割れて床中水浸しになった。彼は底のなくなった瓶を手にとるとラッパのように吹いた。そのフーフーという音の中で、私は冷え切ったベッドに横たわった。

## 革の帽子を買う（買皮帽）

「ボロ市」に屋根付きの小屋がかかる。広い場所が屋根付きの小屋で埋め尽くされる。途切れることなく露店が広がる。靴、靴下、帽子、タオル、みんな必要な物ばかり。一番たくさん売られているのは男性のズボンとシャツだ。私は郎華のことを頭に浮かべた。このズボン、彼にいいんじゃない。値段を聞こうとした時、急に大小の皮の外套が目に入った。仰向いて、高く吊された一列一列の外套を見た。大きな襟、黒い毛皮の襟。馬車夫が着るような外套だけれど、郎華が着てもいいんじゃない？もう一度値段を聞こうとした時、郎華が向こうで私を呼んだ。

「おーい、この帽子どうだ？」彼は四つ耳のある帽子を拳の上に載せて、ぐるぐる回して見せた。猫の頭みたいな帽子に見えておかしくなった。彼のところに行きもしないうちに、私は言った、「だめよ」。

「俺が小さい時、家にはこんな帽子がいくらでもあった」。彼はすぐに頭に被ってみた。たちまち彼は小さな猫みたいになった。「こいつは暖かい」。彼は左右の二つの耳を下ろした。するとた

ちまち小さな犬みたいになった——小さい頃、祖父が私にこんな「吠狗帽」<sup>32)</sup>を買ってくれたことがある。祖父はこれを「吠狗帽」と呼んでいた。

「この帽子はえらく暖かいぞ！」彼はまた拳に乗せ、ぐるぐる回し、ゆらして見せた。

足は小屋の中で我慢できないほど冷えていた。狭い通路をあちこち歩き回って、沢山の飛行帽<sup>33)</sup>をあれこれ軒並み試してみた。黒いのは黄色いより20銭安い。彼は黄色いのが気に入ったが、20銭安いのも気に入った。そこで小屋を歩き回って探すことにした。

「お客さん……何欲しいか？」店を出している人がこう尋ねる。同じ中国人なのに、中国人を日本人や朝鮮人に見立てる。

私たちはそんな人のは買えないので、さっさと出て来た。

郎華が飛行帽を持って来た！二つの大きな皮の耳の上に、二つの小さな耳が付いている。

「急ごう、急ごう」

あちこちぐるぐる回って、ようやくそこを出た。もし彼が私を呼ばなかったら、私は服やズボンに未練を残していただろう。特に馬車夫たちが着る羊皮の外套に。

再び空の見える所に出た。私は急いで郎華を追いかけた！

「あといくら残ってる？」

「50銭」

市場にやって来た。以前食事をしたあの小さな食堂。私はここで肉まんを食べようと言おうとしたが、50銭のことを思うと気持ちを引き締め、自分の願望に背いてそこを通り過ぎるしかなかった。50銭あれば三日食べられる。食堂に入れるわけがない。

街角ではあちこちで落花生や瓜子を売っている。

「銅貨ある？」私は彼を引き留めた。

「ない、一枚もない」

「なかったらいいわ」

「何を買いたいの？」

「何も」

「何か買うなら、お礼があるだろう」、彼は足を止めた。

「瓜子が欲しいの、銅貨がないなら買わない」

多分彼はこう考えたのだ。数枚の銅貨で瓜子を買いたいという妻の願いを叶えてやることができななんて！そこで気前よくポケットを探った。妻に瓜子を買ってやっている場合じゃない、食事は瓜子よりもっと緊急事だ。飢えは愛する人よりもっと緊急事だ。

雪や風に吹かれて私たちは家に戻って来た。手は痛かったし、足も痛かった。私はただ後にくっついて一回りしただけのことだった。

## 看板描きの夢（広告員の夢想）

友人がある映画館で看板を描き、月給40元。看板を描くということに私は強く興味を引かれた。私は朝食の支度をしながら新聞を読んでいたが、またある映画館で看板描きを募集しているのが目にとまり、忽ち心が動いた。私でもできるんじゃない？学生時代、絵を学んだじゃない<sup>34)</sup>。で

も月給がいくらか分からない。

郎華が食事をしに帰って来た。彼に話したが、彼はその仕事に反対だった。彼は「何もかもペテンだ。昨日別の新聞に家庭教師募集の広告があったんで行ってみたんだが、来た人は実際たくさんいた。募集は一人なのに、10人も、20人も……」と言う。

「行ってみるだけなのに何が心配？うまくいかなければそれまででしょ」

「俺は行かない」

「あなたが行かなくても私は行く」

「君一人で？」

「私一人で！」

翌日の朝、私はまたその広告を見つけた。今度は私の欲望がより満たされた。例の広告が改訂されていて、月給は40元。確かに40元。

「ちょっと見て来る。待っていても仕事は来ないでしょ」、私は彼にそう言った。

「行くなら飯を食ってから行け、俺はまだ用事がある」。今度は彼もあまり頑ではなかった。街で彼の友人に出会った。

「どこに行くの？」

「看板描きに応募するの」

「『国際協報』<sup>35)</sup>に載ったやつ？」

「そうよ」

「40元だね！」この40元には彼も注目していた。

交差点の商店に高く掛けられている大時計はまだ11時になっていなかった。12時にならないと募集は始まらない。さんざん探してくたくた、もういやだ。募集代行の「店」<sup>36)</sup>をようやく見つけた。はっきり石頭街<sup>37)</sup>と書いてあったけれど、その「店」は石頭街から一本はずれた通りの端で、すっかり混乱してしまった。「店」に入っていく。大きなビルの二階で、ピカピカの長方形の銅板が廊下に打ち付けられているのが分かったが、それが何の「店」か分からないうちに、私たちは押しとどめられた。「何のご用ですか？」

「看板描きに応募しに来たんです！」

「今日は日曜日だから、休みです」

翌日もう一度行くのには勇気が要った。曇り空で、きれいな雪が舞っていた。その「店」の人はこう言った。

「映画館に直接行ってください。私どものところでは募集を代行していません」

郎華は出て来ると私に恨み言を言った。

「これは君が言い出したことなんだからね。俺が全部ペテンだと言ったのに、君が信じなかったんだ！」

「どうして私に文句を言うの？」私もとてもむしゃくしゃしていた。

「看板描きになりたかったんじゃないのか？なればいいだろう！」

けんかが始まった。彼は私がいけないのだと思っていたし、私は彼が私に腹を立てるのはおかしいと思っている。帰り道、彼は私より少し速く前を歩いて行く。一緒に歩きたくないみたいだ。私の見る目のなさが彼をいらつかせているらしい。衝突はこうしてますます大きくなった。その

時はあの「店」や映画館を恨みもせず、ただ彼は私に腹を立て、私は彼に腹を立てていた。本当の目的はほったらかしにして。二人は言い合いながら帰って来た。

三日目、私はもう行くのはやめた。言い出すこともしなかった。いつものようにストーブに手をかざしていた。彼は一人で出て行った、飛行帽<sup>38)</sup>をかぶって。

「南崗の人には武術を教えないことにした<sup>39)</sup>」。夜彼がそう言った。

私には分かっていた。あの人が習うのをやめたということだ。

翌日彼はまた飛行帽をかぶって一日中外出した。夜になっても私は看板描きの件は言い出さなかった。こうして三日目も言わなかった。私はもうそういう仕事を探すことに関心がなかったのだ。しかし彼は自分から、私よりも気にして、一人でその映画館に二度も足を運んだのだ。

「二回行ってみたけど、最初は社長がいなと言われて、次は何日か後に来てくれと言われてよ。こんちくしょう！がっかりだよ、たった40元のために奴らにいいようにあしらわれてさ。描くのは何の看板なんだ。情欲とか、ロマンスとか、幸福とか、全く恥知らずで胸くそ悪いや！」

彼のふっかけた議論を、私は相手にしなかった。彼は怒り出した。誰かが彼を捕まえて無理矢理看板描きにしようとしているかのように。

「ねえ、俺たちがそんなくだらない仕事ができると思う？くそ！消えちまえ！」彼はとうとう罵り出し、それから自分を罵り出した。「全くろくでなしだ、恥知らずめ、自分勝手な虫けらめ！」

眠りにつくまで、彼はそのことを忘れず、まだこう言っていた。「ねえ、俺たちは自分勝手な虫けらでなければ何なんだろう？自分が飢え死にすることばかり考えて看板を描こうとする。ちょっとうまく描ければ軽薄だって何のそのだ、ロマンスを見たい人を一人でも多くおびき寄せ、豊かさを見せびらかし、人々を一步一步這い上がらせようとする……、そういうことさ、自分が飢え死にすることだけを気にして、どれだけの人に害を及ぼすかはお構いなしだ。人は自分勝手なもんだ……もし誰かが毎月200元くれたら、何だってやるんじゃないのか？俺たちには歴史を動かすことなんてできないし、その反対側に立って歴史を打ち壊す努力もできない！」

彼の言葉は私の心を揺さぶった。しかも知らず知らずのうちに声が大きくなり、彼は更に詳細に自分を分析し始めていた……

「もう少し声を落として、大家さんの所にはよく日本人の友達が来ているわ」と私は言った。

またある日、私たちが「中央大街」<sup>40)</sup>をぶらぶらしていると、ひょろりと背の高い秦さん<sup>41)</sup>が彼の肩をたたいた。冬の午後3時か4時頃、日はもう暮れかけていて、太陽の光が僅かにビルのてっぺんに残り、次第に弱くなっていく。街はすっかり夜の風に包まれていた。歩道でも風に巻き上げられた雪や霜が人々の足を払っていた。

冬、街で友達に会えば、手袋を脱がないまま握手をするのが普通だ。その人の手袋がたぶんとでも冷たかったのだろう、私は郎華の裸の手が、握手をしたとたんにつつまれたのを見た。うつむくと、その拍子に秦さんの大きな革靴に色とりどりの小さな斑点があるのが見えた。

「あなたの靴にどうしてペンキがついているの？」

彼は映画館に看板を描きに行っていると言った。そして映画館はすぐ目の前のあれだと指さして見せ、こう言った。

「仕事はとても忙しい。4時に仕事が終わると、5時には看板を描きに行かなきゃならない。ちょっと手伝ってくれないかな」

そう聞いても、郎華も私も返事をしなかった。

「5時、券売所のところで待っているよ。中に入ればすぐに僕がわかるから」。秦さんは行ってしまった。

夕飯の餅<sup>ピン</sup>は、殆どみな生焼けだったのを飲み込んだ。気が急いで、机にも着かずに食べた、竈の所で食べた。彼の顔は火にあぶられて真っ赤だった。私は立ったまま食べた。買ったばかりの小さな時計を見ると5時を指していた。だからスープの鍋に蓋もしないまま、私たちは出かけた。スープは竈で湯気を立てていた。

私がスープを一口も飲んでいなかったのは言うまでもない。郎華はもう私の前を駆け出している。私は帽子を直しながら彼を追いかけた。表門を出ようとした時、急に竈のそばに柴を積んでいたのを思い出した。火がついたらどうしよう。見に戻った。もう一度外に出た時、彼はもう通りに出ていた。

「食事の支度もさっさとできないなんて！このグズ、遅れちゃったじゃないか！女は全くグズだ、女は何でも間に合わない！」

変だわ、矛盾しているじゃない。こんな仕事はやる価値もないんじゃないの？ どうしてこんなに急ぐの？ 彼は先を争うように映画館に飛び込んだ。私は彼の矛盾した様を見ていた。彼の後ろ頭にも矛盾が見えているみたいで、私は笑い出しそうになりながら、彼の後について中に入った。

ロシア人だろうか、それともイギリス人だろうか。いずれにしても外国人が券売所で切符を売っている。秦さんのことを聞いたが、知らないと言う。他の人に聞こうにも、どの人が映画館の人か分からない。30分待っても秦さんは現れず、家に戻るしかなかった。

家に着いたとたん、彼の学説が始まった。いつものように。「こんちくしょうめ！君が行きたいと言ったんだぜ。だめだ、だめだ！人ってのは自分勝手なもんだ。何度も断られるのもっともだ」。

彼は別のところに出かけて行った。私を一人家に残して。

「君たちどうして訪ねて来なかったの？」 秦さんが皮の帽子を取りながら言った。

「どこに行けばよかったの？ 30分待っても会えなかったのよ！」

「一緒に行こう。郎華は？」

「出かけたわ」

「じゃあ先に行こう。君に手伝ってもらおうよ。毎月40元だから、君が20元、僕が20元。半々にしよう」

看板の所に立ちっぱなしで、10時になってようやく家に帰った。郎華は私を何度も探したのに見つけられなかったの、家の中でプンプン怒っていた。その夜、私は彼と夜中までけんかした。彼は酒を買ってきて飲み、私もそれを奪い取って半分飲み、泣いた。二人とも泣いた。彼は酔っ払うと床でうめきながら、

「仕事さえ見つければ手段もかまわず飛び出すさ、仕事さえあれば、女房だって要らない！」

私は悪い女だろうか。たった20元の金のために夫を怒らせ、床でのたうち回らせている。酒に酔った心は火で焼かれるようだ。お湯が沸き立っているようだ。泣いているけれど何か泣かなけ



ればならないことがあるのだろうか。既に理性が働いていた。彼も私と同じだった。

翌日、酒が醒めると日曜日だ。彼は私と一緒に一日看板を描いた。私は秦さんの助手で、彼は私の助手だった。

三日目は行かなかった。映画館が別の人を雇ったのだ。

看板描きの夢は、結局叶いはしたが、結局破れてしまった。

## 注

- 1) 蕭紅に関する全体的な論としては平石『蕭紅研究—その生涯と作品世界』(2008, 汲古書院)がある。
- 2) 蕭紅らの東北における文芸活動に関しては、平石「ハルビンの抗日文芸運動緒論——金劍嘯の活動を中心に」(『お茶の水女子大学人間文化研究年報』第9号、1986.3)、「蕭紅と哈爾濱」(『満洲国の文化』2005.3、せらび書房)、「星星の火、広野を焼くべし」(『大正大学研究論叢』第13号、2007.3)などがある。
- 3) 蕭軍(1907~88)は遼寧省出身。学名を劉鴻霖といい、田軍、三郎などの筆名を用いている。『商市街』では「郎華」と呼ばれている。東北陸軍講武堂時代に上官と対立して退学し、哈爾濱で創作を始める。蕭紅と出会ったのは1932年夏で、知り合った直後から同居を始め、その年の冬に商市街25号に移る。
- 4) 哈爾濱五日画報印刷社から自費出版される。出版費用は友人たちからの援助に依った。『商市街』中の散文「冊子」は、『跋涉』の出版に関して書かれたものである。「跋涉」への旅立ち—蕭紅『商市街』抄訳(平石、『日本女子大学文学部紀要』第62号、2013)に拙訳がある。『跋涉』に関する論考として、平石「蕭紅の初期作品に関する考察——『跋涉』について」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第4号、1985.4)などがある。
- 5) 蕭紅と蕭軍が東北を脱出する経緯については、平石「蕭軍・蕭紅の東北脱出」(『植民地文化研究』第11号、2012.7)に詳しく述べている。
- 6) これまでの拙訳としては「『牽牛房』をめぐって—蕭紅『商市街』より」(『中国東北文化研究の広場』第1号、2007)、「跋涉」への旅立ち—蕭紅『商市街』抄訳がある。本稿を合わせると、全四十一篇のおよそ半分の二十一篇を訳出したことになる。また『商市街』に関する論考として平石「蕭紅『商市街』の世界」(『野草』第36号、1985)がある。
- 7) 蕭紅は1932年冬、蕭軍と共に「商市街」25号の家に引っ越している。商市街は哈爾濱中央大街の西側の路地の名で、現在は紅霞街と名前を変えている。1981年に哈爾濱で蕭紅生誕70周年記念会が開催された当時、蕭紅が住んだ家はそのまま残されていたが、現在は全て取り払われている。『商市街』に度々出てくる「表門」については記憶がないが、恐らく路地に入る手前に鉄の門が設置されていたのだろう。筆者の記憶にある商市街の家は、半地下の、人が数人入れば身動きが取れなくなってしまうほどの家だった。
- 8) 商市街25号。
- 9) 蕭軍。注3参照。
- 10) 汪玉祥という名前であることが、本稿に訳出した「最後の薪」で分かる。
- 11) 筆者が蕭軍と出会った1981年、74歳の彼は毎朝武術の練習を欠かさなかった。彼の蕭紅について言及した文章や書簡には、自身の強靱な肉体を誇り、翻って蕭紅の病弱なことを指摘する表現が多く見られる。
- 12) 大家さんは蕭紅の学生時代の同級生の家であったらしいことが、この後の文章から分かる。
- 13) 蕭紅は同居していた婚約者に身ごもったまま置き去りにされた東興順旅館から蕭軍等に助け出され、しばらく『国際協報』編集者の裴馨園の家に身を寄せていたが、婚約者の子供を出産した後、欧羅巴旅館に移っている。子供は人にやってしまったという。
- 14) 注7参照。
- 15) 蕭紅は1927年、父親の反対を押し切って哈爾濱の東省特別区第一女子中学に入学しているが、卒業を待たずに退学している。父親から結婚を強く迫られたためだと言われている。この学校での生活の様は、彼女の散文「一本の鉄道の完成(一条鉄路底完成)」及び短篇「手」などから伺うことができる。この中学は現在「蕭紅中学」と名を変え、建物も当時のまま使われているらしい。
- 16) 文中では22歳と言っているが、蕭紅は1911年6月の生まれであるから、実際は21歳のはずである。いわゆる「数え」の年齢ということであろう。

- 17) 哈爾濱郊外の呼蘭の地主の家に生まれた蕭紅は、恐らく自分で竈に火をおこしたことも、煮炊きをしたこともなかったに違いない。当時の若い女性の生活について、蕭紅の異母弟である張秀琢は次のように言っている。「深窓の令嬢とはその名の通り、家の中にいる女性を指した。即ちいわゆる大門（表門）より出でず、二門（裏門）より入らずという閨秀である。（中略）当時娘たちはお下げを結び、くるぶしまで隠れる旗袍を着て、歩くときもしゃなりしゃなりと歩かなければならなかった」。しかし蕭紅はそういった風潮に強く反発していたという。
- 18) 白い綿状の柳の種。風に乗って雪のように舞う。
- 19) 彼等の大家。注12参照。
- 20) 小麦粉をこね、丸く伸ばして焼いた食べ物の総称。
- 21) 列巴はロシア式のパン。内蒙古自治区の額爾古納市には列巴の博物館があるという。博物館のHPによれば、列巴は19世紀末から20世紀の初め頃、ロシアから伝わったとされる。「黒列巴」は小麦と燕麦を使った、酸味のある黒パンである。
- 22) 大家の娘で、蕭紅の中学の同窓生。本稿「引っ越し」参照。
- 23) 中国の1里は500mなので、2.5km。
- 24) 哈爾濱は、19世紀末にロシアによって建設された新しい都市である。シベリア鉄道を南下させるという野望を持ったロシアは、松花江の畔に鉄道の拠点を選んだ。1898年、まず香坊地区にロシア人居住区が建設され、鉄道労働者として哈爾濱にやって来る中国人労働者とロシア人居住区を分けるため、松花江沿岸に建設されたのが、蕭紅たちが住んだ中央大街を中心とするエリアであった。その後、哈爾濱駅の建設とともに、その南側に新市街が建設され、南崗と呼ばれた。蕭紅が入学した東省特別区第一女子中学もこの南崗にあった。
- 25) 北方は寒さを防ぐために、ドアや窓は二重になっている。
- 26) 原文は「冷屋」。食料を保存しておく倉庫のようなところだろうか。
- 27) 注20参照。
- 28) 注15参照。蕭紅「一条鉄路底完成」にもキャンパスが低い板塀に囲まれており、校門から石畳が続いているという描写がある。
- 29) 『商市街』の中で、作者（蕭紅）はこう呼ばれている。
- 30) 哈爾濱では1925年12月、哈爾濱電業会社とドイツのシーメンス洋行が提携し、発電所を建設することが決まった。その後、路面電車の線路敷設が始まり、市内全線で路面電車が開通したのは1927年10月である（李述笑『哈爾濱歴史編年』2013.1、黒龍江人民出版社）が、1987年には全て廃止された。
- 31) 道外の現在の景陽街の南側。19世紀末、中東鉄路公司督辦として赴任した許景澄を記念して命名されたという（[http://www.360doc.com/content/17/0917/19/6017453\\_687920959.shtml](http://www.360doc.com/content/17/0917/19/6017453_687920959.shtml) : 2019.11.10、13:09閲覧）。
- 32) 「叭狗」は犬のチンのこと。寒さを防ぐための「耳」の付いた帽子であろうと思われる。
- 33) 飛行機の操縦士が被るような帽子のこと。
- 34) 蕭紅は絵が得意で、女子中学時代は、上海の美術専門学校を卒業した美術教師、高仰山の影響を強く受けたという（鉄峰「蕭紅生平事跡考」：『蕭紅全集』1998.10、哈爾濱出版社）。蕭紅の小説『生死場』（1935.12、上海容光書局）及び『馬伯樂（第一部）』（1941.1、重慶大時代書局）の表紙は自身のデザインである。このほか、1937年に描かれたと言われる蕭軍の後頭部を描いたデッサンも残っている。また蕭紅は将来パリで美術の勉強をしたいとも語っていたという。曹草成『我的嬌嬌蕭紅』（2005.1、時代文芸出版社）は、蕭紅が小学生の頃、父親に鳥の絵を褒められ、大きくなったら画家になると言ったと記録している。
- 35) 1918年に哈爾濱で創刊された新聞で、そこに設けられた文芸欄、「国際公園」や「文芸」は蕭紅等、いわゆる「東北流亡作家」たちの主たる活動の場となった。蕭紅等と親しかった女性作家白朗（1912～94）も一時『国際協報』副刊の編集者であった。また、婚約者に置き去りにされた蕭紅が助けを求めたのはこの『国際協報』であり、当時の編集者が蕭紅が当初身を寄せた裴碧園であった（注13参照）。
- 36) 原文は「商行」。
- 37) 哈爾濱道里区の、中央大街の一本東の南北に通ずる尚志大街から東に延びる道。その交差点の西側は西十二道街である。現在は哈爾濱市政府などがある。
- 38) 本稿「帽子を買う」及び注33参照。
- 39) 本稿「彼の唇に霜が付く」参照。

- 40) 注7及び注24参照。
- 41) 金劍嘯（1910～36）。瀋陽の刻字職人の家に生まれる。1931年には上海で中国共産党に入党し、哈爾濱に戻ってからは作家、画家、演劇家などとして活動する。哈爾濱における左翼文芸活動の中心的人物である。一時は蕭紅等とともに東北脱出を考えるが、家族のために留まり、1936年、日本軍に捕らえられ、齊齊哈爾で処刑される。上海新華芸術大学で絵画を学んでおり、蕭紅らの創作活動の拠点の一つとなった『国際協報』の文芸欄の見出しは彼のデザインである。そこにはロシア・アバンギャルドの影響が見受けられる。実際金劍嘯はロシア語を学んでおり、ロシア人の友人も多かった。彼が組織した天馬広告社には、蕭紅も参加している。
- 42) 原文は「烤餅」。焼餅の一種。注20参照。